

坊っちゃん

夏目漱石



親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりしている。小学校に居る時分学校の二階から飛び降りて一週間ほど腰を抜かした事がある。なぜそんな無闇をしたと聞く人があるかも知れぬ。別段深い理由でもない。新築の二階から首を出していたら、同級生の一人が冗談に、いくら威張つても、そこから飛び降りる事は出来まい。弱虫やーい。と囃したからである。小使に負ぶさつて歸つて来た時、おやじが大きな眼をして二階ぐらいから飛び降りて腰を抜かす奴があるかと云つたから、この次は抜かさずに飛んで見せますと答えた。

親類のものから西洋製のナイフを貰つて奇麗な刃を日に翳して、友達に見せていたら、一人が光る事は光るが切れそうもないと云つた。切れぬ事があるか、何でも切つてみせると受け合つた。そんなら君の指を切つてみると注文したから、何だ指ぐらいこの通りだと右の手の親指

の甲こうをはすに切り込こんだ。幸さいわいナイフが小さいのと、親指の骨が堅かたかつたので、今だに親指は手に付いている。しかし創痕きずあとは死ぬまで消えぬ。庭を東へ二十歩に行き尽つくすと、南上がりにいささかばかりの菜園があつて、真中まんなかに栗くりの木が一本立っている。これは命より大事な栗だ。実の熟する時分は起き抜けに背戸せどを出て落ちた奴を拾つてきて、学校で食う。菜園の西側が山城屋やましろうやという質屋の庭続きで、この質屋に勘太郎かんたろうという十三四の倅せがれが居た。勘太郎は無論弱虫である。弱虫の癖くせに四つ目垣を乗りこえて、栗を盗ぬすみにくる。ある日の夕方折戸おりどの蔭かげに隠かくれて、とうとう勘太郎を捕つかまえてやった。その時勘太郎は逃にげ路みちを失つて、一生懸命いっしょうけんめいに飛びかかつてきた。向うは二つばかり年上である。弱虫だが力は強い。鉢はちの開いた頭を、こっちの胸おへ宛あててぐいぐい押おした拍子ひょうしに、勘太郎の頭がすべつて、おれの袷あわせの袖そでの中にはいった。邪魔じゃまになつて手が使えぬから、無暗に手を振ふつたら、袖の中にある勘太郎の頭が、右左へぐらぐら靡なびいた。しまいに苦しがつて袖の中から、おれの二の腕うでへ食い付いた。痛かつたから勘太郎を垣根へ押しつけておいて、足捌あしがら

をかけて向うへ倒<sup>たお</sup>してやった。山城屋の地面は菜園より六尺がた低い。勘太郎は四つ目垣を半分崩<sup>くず</sup>して、自分の領分へ真逆<sup>まつさかさま</sup>様に落ちて、ぐうと云った。勘太郎が落ちるときに、おれの袷の片袖がもげて、急に手が自由になった。その晩母が山城屋に詫<sup>わ</sup>びに行つたついでに袷の片袖も取り返して来た。

この外いたずらは大分やった。大工の兼公<sup>かねこう</sup>と肴屋<sup>さかなや</sup>の角<sup>かく</sup>をつれて、茂作<sup>もさく</sup>の人参<sup>にんじん</sup>畠<sup>ばたけ</sup>をあらした事がある。人参の芽が出揃<sup>でそろ</sup>わぬ処へ藁<sup>わら</sup>が一面に敷<sup>し</sup>いてあつたから、その上で三人が半日相撲<sup>すもう</sup>をとりつづけに取つたら、人参がみんな踏<sup>ふ</sup>みつぶされてしまった。古川<sup>ふるかわ</sup>の持つ<sup>もつ</sup>ている田圃<sup>たんぼ</sup>の井戸<sup>いど</sup>を埋<sup>う</sup>めて尻<sup>しり</sup>を持ち込まれた事もある。太い孟宗<sup>もうそう</sup>の節を抜いて、深く埋めた中から水が湧<sup>わ</sup>き出て、そこいらの稻<sup>いね</sup>にみずがかかる仕掛<sup>しかけ</sup>であつた。その時分はどんな仕掛か知らぬから、石や棒<sup>ぼう</sup>ちぎれをぎゅうぎゅう井戸の中へ挿<sup>さ</sup>し込んで、水が出なくなつたのを見届けて、うちへ歸つて飯を食っていたら、古川が真赤<sup>まっか</sup>になつて怒鳴<sup>どな</sup>り込んで来た。たしか罰金<sup>ばっきん</sup>を出して済んだようである。